

古代史散策

No. 090

郡山東部

佐保川に沿って

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

平成17年 4月作成
平成29年 4月復刻

《コース》

7km

近鉄九条駅 — 平城京西市跡 — 西市船着場跡 —
富本銭出土地 — 平城京羅城門跡 — 稗田環濠集落
— 売太神社 — 薬園八幡宮 — 源九郎稻荷神社 —
近鉄郡山駅…解散

《 総 説 》

大和郡山市は、中世、西の京丘陵の南端に構築された郡山城を中心として、佐保川富雄川の間に発達した街である。

郡山から南、田原本辺りまでは大和の国中の中心地域で、この付近から見る青垣山は、西には北から生駒、信貴、二上、葛城、金剛、東には北から春日、竜王、三輪、多武峰、南に大和三山が指呼の間でありその背後に吉野の山々が連なる。大和盆地を流れる全ての川は、郡山西南部に当たる河合町辺りで一つになり大和川となる。

江戸時代より武士の副業として始められた金魚の養殖で知られる郡山は、大和では数少ない城下町の代表で、町名や町並みにその名残りをとどめる。

《 古 代 》

古代大和には、葛木^{かつらぎ}、高市^{たけち}、志貴^{しき}、曾布^{そふ}、十市^{とおち}、山辺^{やまのべ}の6御^み県^{あがた}があった。この中曾布^{そふ}県^{かみ}は、現奈良^{そふのしも}県の北部に位置し、大化の立郡により“添上郡”“添下郡”に分かれた。大和

郡山の地籍は旧添下郡を中心に、添上郡の西部と旧平群郡の東部に相当する。「日本書紀」神武記には「^{そこのあがた}曾富県」の名が見える。

平城京朱雀大路を南下、羅城門前は典薬寮（薬草園）の地で、「薬園」をヤコウ（矢興とも書く）と称し、現大和郡山市の市街地となっている。郡山城天守台北側の左京堀は、平城京南京極道路南側の堀跡とみられ、現東奈良口町、西奈良口町、観音寺町は、平城京右京一坊大路の名残りである。

《 郡山城 》

天正6年(1578)、戦国大名 筒井順慶が城を築き、郡山村・薬園村を根幹に城下に取り込んだことに始まり、豊臣秀長・秀保、増田長盛の時代に一応完成した。

大坂の陣後、水野勝成（元和元年：1615）が、同5年初代の大坂城代松平忠明が入城し、寛永16年(1639)本田政勝、延宝7年(1679)松平信之、貞享2年(1685)本多忠平、享保9年(1724)柳沢吉保が入城、以降柳沢氏が代代藩主を継いで、明治の廃藩置県に至った。

このように郡山藩に、徳川の有力な譜代家臣が配置されたのも、京・大坂に近く、政治的、軍事的重要性に基づくものであった。

《 各 説 》

【平城京西市跡】

大和郡山市九条町

わが国最初の官営市場で、朱雀大路を挟んで東と西に「市」

が設けられ、奈良市西九条に残る“東市”と共に都内に住む人々（20万人？）のマーケットの役を果たしたと思われる。

建物や井戸の跡が検出され、交易銭や和銅開珎も出土している。

※交易銭…西市で通用したもので木の貨幣であった。

【平城京西市船着場跡】

大和郡山市九条町

市に接して、市場に物資を運ぶための運河（東堀川と西堀川）が作られた。西市は、秋篠川と西堀川の接続する処で、佐保川から西堀川を通してこの船着場に着き、西市への物資が荷揚げされた。

《秋篠川の川違え》

奈良時代、秋篠川は登美ヶ丘に発し、西大寺北方の秋篠で押熊川を合流、平城京の城坊に合わせて直線的に南下していた。

文禄5年(1596)、増田長盛が郡山城の城下町形成のために、川の流路をそのまま“城の外堀”として利用し（外堀緑地）、本流を城下町に入る手前で直角に曲げて佐保川と結んだ。

【九条公園・富本銭出土地】

大和郡山市北郡山町

平成11年、明日香村の飛鳥池遺跡から大量の富本銭が出土し、和銅開珎より30年も前に作られた、わが国最古の貨幣であることが判明したが、この富本銭が初めて出土したのが、ここ平城京跡であった。

平成7年に行われた発掘調査で、奈良時代の深さ3.5mの

井戸の底から「富本」と刻まれた銅銭が出土、直径は約2.5 cm、重さ約4 gで「富」と「本」という文字を上下に配しその左右に七曜文と呼ばれる七つの点を配してあった。

^{らじょう}
【羅城門跡】

奈良市西九条町 左保川東岸

平城京朱雀大路の4 km先の南端にあり、九条大路と交わる平城京の南の玄関口である。

現在門跡は、左保川の流路によって殆ど破壊されているが、発掘結果から推定される規模は、間口5間(約33m)奥行3間(約23m)で、朱雀門と同規模の壮大なものであったと思われる。

門の礎石は佐保川の河川敷の下にあり、一部は郡山城の天守台の石垣に使用されて残っている。門基壇の一部が、朱雀大路西側築地及び側溝、北側側溝が検出されている。

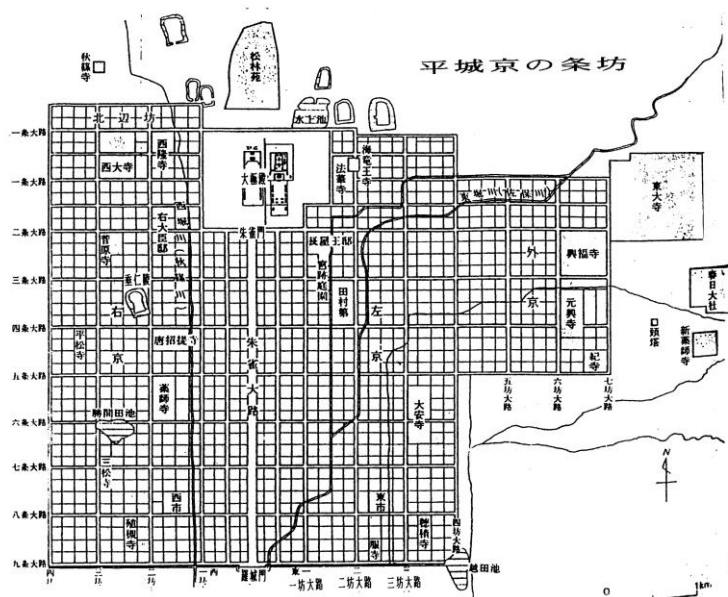
^{ひえだ}
【稗田環濠集落】

大和郡山市稗田町

稗田は、古代の幹線道路「下ッ道」が通る集落で、村の周囲に濠(幅4~14m、深さ2~3m)を東西約250 m、南北約200 mめぐらせてあり、現在も環濠や集落の道路がほぼ完全な姿で残っている。

口伝によれば、当地が水利に乏しく稗を食べているのを聖徳太子が哀れみ、東方(現 JR 桜井線 帯解駅西側)に広大な池を掘り、稗田村民に与え水利の便を計ったと云う。一説には、弘法大師が築いたとも云われている。

後年、付近集落に水争いがあった折も、末流にありながらも奈良町奉行により優先利用が保証されていたと云われる。



^{めた}
【売太神社】

大和郡山市稗田町

^{ひえだのあれい} 稗田阿礼を主神に、^{あめのうずめ} 猿田彦命、天鈿女命を併祭している延喜式内社で、勧学の神、語り部の始祖として信仰を集め、最近「童話の神様」として親しまれている。

稗田阿礼は、天鈿女命の後裔で「古事記」の編纂に関わった語り部と伝承されている。

天鈿女命は、神代 天の岩戸の前で殆ど全裸になって踊り、天照大神を誘い出した神として知られている。

この地は、古代神楽舞などに供奉した^{ぐぶ}猿女君氏^{さるめのきみ}の居住地と伝

えられている。古代より朝廷の祭祀に携わってきた氏族の一つで、天鈿女命を始祖としている。

《奈良盆地の環濠集落》

鎌倉末期から戦国時代にかけて、防衛と灌漑用水確保を目的として成立したと思われる。

環濠集落は、畿内を中心に近畿地方に多く見られるが、奈良盆地には200前後に及ぶ環濠集落の存在が認められる。

奈良盆地の中でも環濠集落が多数分布するのは、北の大和郡山市から南は橿原市、大和高田市にかけての地域で、殊に田原本町南部に多く存在している。現在比較的によく残っているのは、大和郡山市のここ稗田及び若槻、天理市の竹之内、田原本町の保津・宮古、広陵町の南郷、橿原市の膳夫^{かしわて}などが挙げられる。特に稗田は、県内環濠集落の代表的なもの知られている。

《下ッ道》

7世紀頃につくられた官道で、ほかに上ッ道、中ッ道があり、いずれも平城京と藤原京を結んでいる。

下ッ道は、朱雀大路～稗田～田原本～新ノ口～八木～見瀬（丸山古墳）を結ぶ全長25kmで、道路幅は約30～40mあった。後に北は歌姫を経て山城まで、南は葦原峠を経て吉野まで延伸された。

現在では幹線道路としての役割を終えている。

稗田環濠集落の形 右下方の森が売太神社



やくおん
【薬園八幡宮】

大和郡山市材木町

祭神は、品陀別命（15 応神天皇）・息長足姫命（神功皇后）の2柱。続日本紀 天平勝宝元年(749)に見られる古社である。

神社は、中世の東大寺領薬園荘の鎮守として創建されたと伝えられ、始め南方の現お旅所のある塩町にあったが、郡山城築城に際し現在地に遷されたものである。

本殿（県文化財）は、一間社春日造・檜皮葺、江戸時代に再建されたが、桃山時代の様子を残している。

とうせんじ
【洞泉寺・源九郎稻荷神社】

大和郡山市洞泉寺町

山号 霞溪山。木造阿弥陀三尊立像（鎌倉時代作：国重文）を本尊とする、浄土宗の寺院である。

天平9年(737)僧 宝与の開基になり、三河国 拳母ころもにあったものを、豊臣秀長が天正9年(1851)平群郡長安寺村に移し、更に天正13年(1585)現在地に移転した。

境内に石棺と云われている湯槽石（光明皇后が病人を癒すために用いたと伝えられる）や、南北朝時代の作と云われる石造地藏菩薩立像がある。

《源九郎稻荷神社》

境内にあるこの神社は、洞泉寺記録に「豊臣秀長が郡山城築城の際、その守護神として吉野川の畔から遷祀したと伝え、

当初は城内の竜雲郭りゅううんかくにあったものを、享保4年(1719)この地に遷座されたと云う。

37天智天皇の御代、大伴金道麿が平群真鳥を討ったときに、この稻荷神が多くの白狐を遣わして平定したとか、源義経が、

兄 頼朝の討手を逃れて吉野山へ落ちたときに、この神の使者の白狐が佐藤忠信に化けて、愛妾 静御前を彼の許へ送り届け、義経がその謝意を表すために“源九郎”の名を贈り、それが社名の由来になったなどの話が伝わっている。

《メモ》

作成 末岐敏一
復刻 宮下章宏
案内 宮下章宏、外村恵三

